第64号　50円
昭和54年11月25日

内　容

日加修好五十周年を祝う…… 1
昭和54年度共同セミナー委員会… 2
新しい委員会の発足に際して…… 2
千人会…… 3
第16回大学教員懇談会……4〜6
特集―8・9月の国際集会から…7〜9
事業部だより……10
自由な空間……10〜11
館長日記から……11
利用状況……11

# セミナー・ハウス
# SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人　大学セミナー・ハウス
＜所在地＞
東京都八王子市下柚木
（〒192-03）
電話　0426-76-8511〜3
振替口座　東京　74590番
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

## 日加修好五十周年を祝う

### 日加学術会議を主催して

津田塾大学教授
日本カナダ学会会長
馬場伸也

日本とカナダ間に正式の外交関係が樹立したのは、一九二九年秋のことである。だが、両国間の文化交渉史は、それより半世紀以上も前から開始されていた。カナダ・メソジスト・ミッションの来日である。その影響でキリスト教に入信した人たちに、中村正直、横井時雄、山路愛山、青山学院長となった高木壬太郎、北村透谷と協力して日本最初の平和運動を展開した加藤万治らがいる。カナダ・ミッションは、日本の慈善事業や近代教育、とくに女子教育の発展に大きく寄与した。カナダ・メソジストが直接あるいは間接に育成した学校に、東洋英和学校、その普通科として成長した麻布中学、関西学院、青山学院、東洋英和女学院、静岡英和女学院、山梨英和女学院らがある。また、カナダから派遣された聖公会の宣教師アレキサンダー・ショーは、避暑地軽井沢を開発した。

カナダ人が日本へやってきたのとは逆に、日本からカナダへでかけていく人々もいた。移民である。一八七七年、長崎県人・永野萬蔵が最初にカナダへ入国して以来、日清・日露戦争のころともなると、カナダ移民が激増し、一九〇八年には七、六〇一人もの入国者があった。そこで突発したのが「ヴァンクーヴァー暴動事件」である。一九〇七年九月七日、アジア人排斥同盟主催の大演説会に出席した聴衆は、群をなして中国人街、日本人街を襲撃し、甚大な被害を与えた。こうした排日移民問題は、日本をして自発的に移民を制限する「ルミュー協約」を締結させ、ワシントン会議で「日英同盟」に代替するものとして、日・英・米・仏からなる「四国条約」を成立させる一因ともなった。さらに太平洋戦争中は、日系人は「敵国人」として廃鉱に抑留され、苦闘を重ねて築き上げた彼らの生活基盤は、一挙にして水泡に帰してしまった。戦後になって、カナダの対日態度は著しく友好的になった。とりわけ新憲法の制定は、カナダに負うところが大きい。

極東委員会では日本の憲法問題をめぐって、列強間に激しい対立がみられた。例えば、アメリカは三権分立を、ソ連は社会主義的憲法を、イギリスは議院内閣制を、オーストラリアは天皇制の撤廃を強調した。これら齟齬するさまざまな意見を調整し、日本国憲法の基本原理を打ち立てたのは、憲法（第三運営）委員会で議長役をつとめることが多かったカナダ代表であった。ところが、新憲法が制定されて間もなく、極東委員会は再び新憲法改正の是非を討議しはじめた。この動きに真っ向から反対したのが、当時在日カナダ代表部首席をつとめていたE・H・ノーマンであった。彼は新憲法の民主的性格擁護の必要性と、憲法改正は日本の民意によるべきことを力説した。結局、ノーマンの主張は列強の受け入れるところとなり、新憲法はそのまま日本の土壌に定着することになったのである。

講和後における日本の主な外交目標は、国際社会に尊敬されるメンバーとして再登場することであったが、カナダはいろいろなかたちで日本を援助した。例えば、一九五四年一〇月の「コロンボ計画委員会」ではカナダの動議で日本の加盟が決定し、五六年には、日本はカナダ、アメリカの支持、推挙を得て国際連合に加盟することが出来た。さらに一九五五年のGATT加入、六三年のOECD加入等に関しても、カナダは常に積極的に日本を支持した。トルドー政権下では、カナダは日本をEC諸国と並んで最重要視するに至り、一九七六年には「日加経済協力大綱」「日加文化協定」が締結され、「三木・トルドー共同声明」も発表された。

このように日本とカナダの関係は、決して因縁浅からぬものがあった。今後日本は、エネルギー・資源問題等で、カナダに一層頼らざるを得なくなるのは必定である。しかしそれにもまして重要なことは、冷戦→多元的国際関係の展開という国際政治の構造変化のなかで、カナダのような堅実な「中型国家」ともっと積極的に相提携していくことによって、超大国支配の世界政治を改変するよう互いに協力していくことであろう。

そうしたことも踏まえて、日本カナダ学会とアイセック（国際経済商学学生協会）は去る8月31日〜9月2日、当セミナー・ハウスにおいて、修好五十周年記念「日加学術会議」を開催した。会議には、カナダ側からはヒュー・L・キーンリーサイド初代代理公使、ブルース・ランキン駐日カナダ大使はじめ一〇名の学者・専門家と三十数名のカナダ人学生が、日本側からは歴代の駐加日本大使牛場信彦、近藤晋一、奈良靖彦各氏ら、のべ五百数十名（うち約三十名はパネリスト）が参加し、カナダ史、移民問題、カナダ文学と社会、日加関係、国際経済と日加協力等、多岐にわたる諸問題について、三日間熱心に討議を重ねた。

会議は、美しい武蔵野の自然につつまれた大学セミナー・ハウスを全館借り切って、日本人とカナダ人が寝食を共にしながら行われたため、友好を深めるのにも最良の環境を得た。セミナー・ハウスでは、このような大規模な国際会議ははじめてとのことであったが、飯田館長はじめスタッフの方方が実に行き届いたご配慮を下さったので、会議は大成功を収めることができた。カナダ人の学生たちも帰りには「ワンダフル！」を連発していた。私が今回の経験からいいたいことは、今後もっと多くの国際会議または国際セミナーが大学セミナー・ハウスを会場として計画されるよう学会関係者に確信をもって勧めることができることである。

# 昭和54年度共同セミナー委員会
## 新陣容なる

●第一回共同セミナー委員会
●9月17日　17時半〜20時半／於・私学会館

本年度は、別記のように新任委員に七名の方々を委嘱し、再任委員五名、留任委員一二名を加えた二四名で委員会が発足することとなった。

第一回委員会は、次の一三名の出席の下に開催された。

岡宏子、野田春彦、山岸健、谷口汎邦、板垣雄三、熊坂敦子、小池滋、香原志勢、小松茂夫、杉原泰雄、今井義夫、阿久津喜弘、森田桐郎。

議事は、まず飯田館長より開会の挨拶と新委員の紹介が行われ、つづいて前年度正副委員長との協議に基づき、岡宏子氏を本年度の委員長に四度推したい旨の提案がなされ、全員一致で岡氏が選出された。岡委員長は副委員長に、野田春彦、山岸健両氏を指名し、全員の賛成を得て承認された。

次に、今年度すでに実施された共同セミナー第102回と第103回の報告がそれぞれ企画室および谷口委員から、第1回大学院共同セミナーについては岡委員長と企画室から行われた。続いて第105回、第106回の準備報告が、熊坂委員、企画室よりそれぞれ行われ、さっそく今回の主要な議題である本年度第4四半期二回分の企画についての協議に移った。協議をはさんで新任委員を歓迎する晩さんの食卓を囲み、極めてなごやかに談論し、委員相互の親交を深めた。

活発にくり広げられた話し合いから、いくつかのテーマが岡委員長によって整理され、企画室から提示された実施時期を含む年間計画の展望を確認して、8時半閉会した。

なお、今回の委員会の協議に基づき企画室で準備を進め、実施できることになったセミナーは12ページの予告と3月開催予定の第108回「イスラムの世界」である。

【共同セミナー委員】
（就任順・50音順、○印は新任）

＜委員長＞
岡　宏子　聖心女子大教授

＜副委員長＞
野田　春彦　東京大教授
山岸　健　慶応義塾大教授

＜委員＞
谷口　汎邦　東京工業大助教授
黒田　道雄　成蹊大教授
佐竹　寛　中央大教授
外山滋比古　お茶の水女大教授
友部　直　共立女子大教授
村田　勝彦　早稲田大教授
板垣　雄三　東京大助教授
小畠　守生　慶応義塾大教授
北村　甫　東京外語大教授
熊坂　敦子　日本女子大教授
小池　滋　東京都立大助教授
香原　志勢　立教大教授
高須　裕三　日本大教授
西川大二郎　法政大教授
○阿久津喜弘　国際基督教大教授
○今井　義夫　工学院大助教授
○小松　茂夫　学習院大教授
○杉原　泰雄　一橋大教授
○富塚文太郎　東京経済大教授
○馬場　伸也　津田塾大教授
○森田　桐郎　東京大教授

## 新しい委員会の発足に際して
### ――正副委員長の談話から――

本年度の共同セミナー委員会が、上記のように新しい委員七名を加え、例年よりやや遅れて9月17日発足したが、交友館落成、大学共同セミナー100回など、記念すべきセミナーに湧いた昨年の活動を引き継いで、さらに清新な風とエネルギーを吹き込んだ共同セミナーを企画し、実行に移したいと願っている。

同一年齢層の38%が大学に入るという日本の現状の是非論はさておき、昨年はその進学率が少しではあるが低下をみせ、「猫も杓子も大学へ」の趨勢に変化がおころうとしているともいわれたり、また、これを契機に改めて「大学とは何か」「大学教育はこれでよいのか」を問い直そうという声もあがっているようである。大学教育の再検討の時を迎えているのかも知れない。

それにつけても二〇年前に、日本の大学教育の持つ問題点を真正面から取り上げ、セミナー・ハウスの構想を打ち立てて、それを実現すべく、文字通りの推進力としての力を発揮してこられた飯田館長の情熱と努力の意味に改めて感じ入るとともに、その構想を支持され、建設に参画された現理事長茅誠司先生を始め先輩諸氏の卓見には、心から敬意を表するものである。そして、開館と同時に開始された大学共同セミナーを支えてこられた八〇〇余名にのぼる指導教授達の、国公私立のワクを超えた協力を思うにつけても、現在、共同セミナー委員会に連なる私どもは、そのよき伝統を継承していきたいと願っている。

明年、開館十五周年を迎える大学セミナー・ハウスは、法人運営の面においても何か大切な時に来ているように思う。新しく岡山専務理事が就任されたことが、この創設の「心」と、これまで多くの人々の協力によって大学セミナー・ハウスの果たしてきたユニークな大学教育の役割の発展にさらに力を加え、これからの共同セミナーの活動にも新しい方向を与えることになるようにと念じながら、本年度の新しい活動について考え、話し合っているのである。

（岡宏子、野田春彦、山岸健記）

## ●寄贈図書
### 54年7〜8月

「Peace Research In Japan 1978—79」日本平和問題懇談会殿
「社会学論叢」No. 75　笠原正成殿
「文化と精神医学」　小田　晋殿
「アジアの友」4〜5月号　アジア学生文化協会殿
「私学助成の思想と法」　尾形　憲殿
「採集と飼育」7〜8月号　日本科学協会殿
「国際交流」No. 20「外国文化紹介講演会」8　国際交流基金殿
「人間の音楽性」　徳丸吉彦殿
「金融経済」No. 176　金融経済研究所殿
「国際協力」6〜8月号　国際協力事業団殿
「会報」第38号　大学基準協会殿
「政治経済史学」No. 156〜157　政治経済史学会殿
「対人関係の心理」「集団の心理」「社会心理」「心理学的社会心理学」　中村陽吉殿
「大学研究ノート」第36〜38号、「大学論集」第7集　広島大学大学教育研究センター殿
「多摩芸術学園紀要」第4巻　勝間ひでとし殿
「Screen English」9　荒井良雄殿
「Stories From Asia Today」ユネスコ・アジア文化センター殿

日加修好五十周年展示（本館ラウンヂ）

# ◆千人会◆

◇昭和54年8～9月◇

**◇現在会員は一、五八五名です**

大学人＝一、一九五名
社会人＝　三九〇名

**◇新しく会員となられた方々**

三名〔第50回報告(申込順)〕

A　レーモンド設計事務所　天野　正治殿

B　明治大学経営学部教授　横田　澄司殿

C　千葉県立中央図書館司書　荒井　督子殿

**◇会費ありがとうございます**

昭和54年8～9月（敬称略）

田辺多喜、川原啓美、吉田美穂子、原誠、土方保、詫摩武俊、十代田知三、新井勝紘、滝幸三郎、竹内由亀、井上孝、古本捷治、横田澄司、天野正治、鹿島健次、総山孝雄、大蔵隆雄、安宅光雄、川合隆男、岸英朗、三宅彰、上原章、長野武、品川孝次、米地実、滋賀秀三、中川作一、高村象平、坂本清、鈴木成文、大吉芳彦、松原治郎、簗田長世、合田周平、土橋信男、菊池百合、稲田拓、中島文夫、小林正一、久保三男、芹沢正三、藤井隆、小澤重男、浅井邦二、志賀英、岡本剛、田中庄蔵、村松暎、山本尚志、石井竹松、伊東一江、鳥山英雄、伊藤一郎、関田寛雄、小西悟、福井正紀、村上光雄、城範子、原島幸太郎、喜多勲、鈴木修次、時枝満康、山本芳夫、中川重雄、宮野三郎、竹下敬次、岡村文子、圭室文雄、海老沢克之、石橋秀雄、福山仙樹、友部直、山本武彦、原田行男、萩原龍夫、福島正久、高島善哉、松瀬貢規、山口重克、小田切松義、児玉久雄、長尾龍一、穐山貞登、若槻泰雄、花島重春、横山定雄、伊藤清子、楢林博太郎、大河内繁男、永井克孝、片山覚、西村善四郎、押田勇雄、佐野晃、松村信治郎、下田弘、片山清一、伊藤良二、市川博、朽津耕三、子安美知子、井手久登、北沢高純、黒田孝郎、藤永光之、高村弘毅、早弓惇、村上陽一郎、武澤信一、坂本義和、山本満、松田徳一郎、田村恭、高村多賀子、増田茂樹、猪瀬尚志、渡辺昭夫、中村英勝、松田武彦、藤井幸彦、長松昭男、三村卓雄、小堀桂一郎、横山宏、松尾登、出居茂、町野朔、井深淑子、谷俊治、坂田道太、荒井督子、加藤栄一、佐藤和男、泰本融、大澤綱一郎、麓信義、飯吉厚夫、後藤米夫、古屋野正伍、西野万里、高橋節子、小田切美文、平野健一郎、鈴木守、大束百合子、朝倉孝吉、小堀巌、神山四郎、佐藤康胤、池上秋彦、相良惟一、岡野行秀、鞍馬菊枝、安嶋彌、関本昌秀、森口繁一、内ヶ崎饗五郎、石村善助、伊能敬、吉利和、川村亮、鈴木忠義、小林善彦

**◇会費に添えられた言葉を拾う**

明8月9日にこちらを発ちまして、ミュンヘンへ国際会議（物理学）などのために、約一ヵ月余り滞在の予定で参ります。ご発展をお祈り申し上げております。

日本大学教授　小林正一

♥

今年も無事に誕生日を迎えました。自祝の意をこめて会費を送らせていただきます。セミナー・ハウスが更に発展するように祈りながら。

独協大学教授　中島文夫

♥

今年は周囲に病人が多かったりして、健康で誕生日をむかえられたことを非常にうれしく思っています。こどものとも社の仕事を依頼され、幼稚園や保育園の先生方、また保護者の指導のため、比較的多忙にすごせることを感謝しています。そのうちセミナー・ハウスを使用出来たらと思います。

旧職員・東京保育女子学院講師　菊池百合

♥

四六歳になりました。いよいよ西和辞典の編纂に取り組まねばならないかもしれません。

東京外国語大学教授　原　誠

♥

元気で六一歳の誕生日を迎えることができましたので、ささやかな気持をお届け致します。

主婦　伊東一江

♥

第五五回の誕生日を迎えました。お祝いのカードありがとうございます。今後共よろしく。

早稲田大学教授　浅井邦二

♥

しばらくギリシア、キプロスなどに参ります。身辺を整理しておりましたら、昭和53年度分千人会費が未納であることに気がつきました。今年分と併せてご受納下さい。共立女子大学教授　友部　直

♥

徒らに歳月が過ぎ思ふことの何分の一も実現しないことに焦ら立つ思ひもありますが、兎に角できる限りのことをする外はありません。セミナー・ハウスを想ひつつ……。

東京大学助教授　村上陽一郎

♥

今夏、日本アルプス後立山連峰の一つ唐松岳に登り、そこで誕生日を迎えました。山は自分が正対すべきものに、きちっととりくんでいるか問いかけてくる、わたくしの厳しい師であります。

横浜国立大学助教授　市川　博

♥

今年の4月に停年のため教授をやめ名誉教授に推薦されました。

武蔵工業大学名誉教授　下田　弘

♥

誕生カードありがとうございました。9月1日に医科研にもどり、同日ヨーロッパの学会のため渡欧致します。かの地で元気に誕生日が迎えられる前祝いのようで、誠にうれしい贈物でございました。セミナー・ハウスのご平安をお祈り致します。

東京大学教授　永井克孝

♥

八王子市は北海道苫小牧市と姉妹都市を結んでいるとか。それも北方警備と開拓のため「千人同心」が江戸時代渡道し、活躍したことによるという。今は、ここの千人会は全国に。

計測自動制御学会主事補　猪瀬尚志

♥

夏の間、私は原稿整理、家内はマスター論文準備のため交友館を大いに利用させていただきました。大変、良い居心地でした。ありがとうございました。

上智大学助教授　町野　朔

♥

B会員になりますのでよろしく。大学共同セミナーの案内が通信（会報）の時と一致する場合はお送り下さい。学生に掲示しますので。　弘前大学講師　麓　信義

## 寄付金報告

**54年9月末現在**

ご支援を感謝して拝受いたしました。

＜一般寄付金＞

一五、〇〇〇円　相模女子大学翠葉会茶道部一同殿

＜視聴覚施設・設備充実募金＞

一七、五〇〇円　東京理科大学理工学部物理学科大澤ゼミ殿

一〇、〇〇〇円　ゆりが丘聖書研究会殿

一、三〇〇円　日本電気㈱殿

二五、〇〇〇円　国際基督教大学教授　都留春夫殿

三、〇〇〇円　日本電気㈱情報処理流通・サービスシステム事業部販売促進部殿

三、二〇〇円　学習院大学児玉ゼミ殿

一、〇〇〇円　成蹊大学法学部宇野ゼミB殿

四、二四二円　横浜国立大学教育学部教育学殿

# 第16回大学教員懇談会

## 主題――大学入試を考える

### 第1回「共通第一次学力試験」の成果と課題をめぐって

期日――昭和54年9月29～30日

▼講演
Ⅰ大学入試センター所長　加藤陸奥雄氏
Ⅱ文部省大学局大学課長　滝沢　博三氏
Ⅲ日本経済新聞編集委員　黒羽　亮一氏

▼パネル・ディスカッション
①「高校側の意見をきく」
【発題者】
都立日比谷高校長　風巻　磊蔵氏
都立第一商業高校長　笠井　重徳氏
日大第二高校教諭　村上　光雄氏
麻布高校教諭　森　昭彦氏
城北高校教諭　石崎　広義氏
日教組高校部副部長　橋本　三郎氏
②「大学側の意見をきく」
【発題者】
東京大学教授　湊　秀雄氏
筑波大学教育計画室長　高野　文彦氏
横浜国立大学教授　飯塚五郎蔵氏
慶応義塾大学塾監局長　関口研日麿氏
早稲田大学教授　浅井　邦二氏
【世話人】
国際基督教大学教授　三宅　彰氏（代表）
東京農工大学教授　川村　亮氏
筑波大学教授　司馬　正次氏
国際基督教大学教授　原　一雄氏
日本大学教授　水島　義治氏
電気通信大学教授　望月　仁氏
東京大学教授　寺山　宏氏

〈参加者〉73名
ＩＣＵ(4)、筑波大、千葉大、東大、東京農工大、東京工大、電通大、慶大、東京理科大、日大、立大(各3)、都立大、学習院大、芝浦工大、東京経済大、日本女子大、成蹊大、中央大、お茶の水女子大(各2)、東京外大、都留文科大、青山学院大、順天堂大、東京女子大、東洋大、法大、早大、神奈川大、相模女子大、文教大、横浜国大、法政一高、都立日比谷高、都立第一商業高、日大二高、麻布高、城北高、日教組、文部省、大学入試センター、日経新聞、朝日新聞（各1）（注＝発題者、世話人を含む）

○

大学教員懇談会が昭和45年9月「日本における大学改革の反省と展望」をテーマに発足してからすでに一五回、その間大学入試に関してはもとより強い関心をもっており、今までに「入試改革の現状」(46年)、「大学入試期日について」(48年)と二回にわたり研究、討議をかさねてきた。今春ついに実施を見た第1回の「共通第一次学力試験」の成果を見さだめ、将来への展望をさぐることこそ当懇談会がぜひとも取り上げねばならぬ課題だということで、三宅彰教授はじめ世話人諸氏の熱心なご参画を得て、二度にわたる準備会を持ち、企画が練られた結果、ここに各大学、高校関係者多数ご参加の下、充実した討議と意見交換の場を設けえたことは当ハウスの幸せとするところである。以下、二日間にわたる第16回懇談会の模様を概略ご報告したい。

**●共通一次を実施して**

第一日はまず今回の共通一次試験実施の当事者である大学入試センター所長加藤陸奥雄氏と文部省大学局大学課長滝沢博三氏の講演から始められた。

【加藤大学入試センター所長講演要旨】世論にこたえて八年間、国大協で検討をつづけた結果を受けて作り上げたのがこんどの制度で、今後改善はあっても解消することはない。実施前、実施後さまざまな反響があったが、とくに二次試験後は誤解も減って、評価の声がかなり出てきたのはうれしい。共通一次がひとり歩きするように誤解されたが、一次と二次はあくまでセットで考えてほしいし、これをどう組み合わせ、どういうウェイトの置き方で総合評価をみちびき出すかは各大学が個々に工夫すべきだ。一次試験はコンピューター処理の必要もあって客観テスト、高校基礎学力の達成度をはかる目的のもの、これに対して二次試験には論述や面接を加えたところが多く、全人格的テストの色彩がつよいのと、各大学の個性に合わせた適性や資質の発見というところに焦点をしぼった科目選定が特徴となっている。

実施前の予想として、国公立の間で学校間の格差が出てこないか、有名校に志望が集中しないかという懸念があったが、これははずれた。問題がやさしすぎなかったか、平均七〇点は越すだろう、といった声もあったが、実際は六四点でほぼ理想どおりだった。一期校、二期校の制度を廃止した結果についていうと、試験実施後、正解と配点（最高点、最低点、平均点、標準偏差）を発表することによって自己評価を自分で行うようにすすめた。くわしくはまだ調査、分析が終わっていないが、自己採点の結果、志望校がバラまかれて、二次試験の競争率にひどい偏りは出なかった。まずまずの成果だったように思う。五教科七科目は多すぎるという声もあるが、一次試験のねらいからいうと、六、七科目は必要だと思う。足切り問題、二次募集の問題など、いろいろ心配もあったし、今後も問題は残るだろうが、科学的分析の上で善処してゆきたい。

ただ一つ問題なのは高校の教育課程が昭和60年からたいへん変わるということだ。いわゆる〈ゆとりある教育〉という観点から、必須科目と選択科目が大幅に変わる。これに対しては当然入試方法も変えてゆかねばならない。58年までには公表しなければならない。

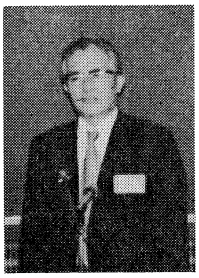
入試センターもこの秋やっと専任のスタッフが決まるといった段階にあり、研究部門などはこれから活動をはじめるところで、大学・高校関係者のご協力を願って、改善、完成をはかってゆきたい。数年後にはかなり姿を変えているかも知れないし、そうあっていいと思っている。

【滝沢大学課長講演要旨】共通一次試験についてはいろいろ対立、矛盾した要求や意見が出されている。資料をすべて公開しろといわれるが、大学間の序列の公開、固定化は困る。また一次、二次方式で受験生の負担がますます過重になるというけれども、多角的で綿密な試験こそが必要で、まるめて二で割るような方法では混乱は救われない。

入試制度について大学のみならず高校側から強い意見が出てきたことは結構だ。初等、中等から高等教育に向っての下からの流れの中でこの入試制度をとらえることが必要であり、教育の大衆化現象の中で考えていかねばならない。第一に進路指導、つぎに大学の中のコース選択、コース転換、そして生涯教育が叫ばれる現代社会との関連の中でもっと自由に流動的に考えられなければならない。入試に対して相変わらず過剰な期待がかけられすぎているように感じられてならない。従来の固定観念から解放された柔軟で自由な発想と提言をお願いしたい。

**●パネル「高校側の意見をきく」**

【風巻日比谷高校長】高校長協会総会での要望事項を総括すれば、①試験場は管理上むずかしい問題もあるだろうが、受験生の立場を考え、できるかぎり多くし便宜をはかってほしい。②現在の五教科


講演される加藤陸奥雄氏

七科目を五教科五科目、せめて六科目にできないか。③従来、国立は一期、二期の二回受験できた。国公立大の定員発表に際し、二次募集のための定員を用意して、受験回数を確保してほしい。④足切りはなくしてほしいが、少なくとも足切り倍率をゆるやかにしてほしい。⑤二次試験の場合、同一学部、同一学科については、できればある程度の科目の統一をしてほしい。⑥入試時期をできれば2月上旬まで繰り下げてほしい。⑦新しい指導要領にそってどう改めてゆくのか、55年度までに方針を示してほしい。

【笠井都立第一商業高校長】　職業高校からの要望として①推薦入学の道を開くこと。できれば無試験入学、もしくは一次試験を参考に。②共通必須の専門基礎科目を試験科目に入れること。

【村上日大第二高教諭】　私学教育研究所内大学入試研究調査委員会で46年以降、数回にわたるアンケート調査の結果は、共通一次テストについてメリットよりデメリットと見る項目がつねに多かった。とくに、①全国的に画一化することにより高校教育の自由度を狭める。②高校、大学間の格差をますます助長する。また、こんどの共通一次についての中、高校生のアンケート調査においても、これを改善とする声より改悪とする声がはるかに多い。

パネル「高校側の意見をきく」――
左より風巻，笠井，村上，森，石崎，橋本の諸氏

委員会としては通称XYZ方式といっている「複数資料による別枠選抜制」を提案しているが、これは、①従来同様の一回の学力検査で選抜する方式でX%、②資格試験と、要すれば内申書を総合した方式でY%、③受験生が自己の特殊な才能を申告して、それを大学が審査するという方式でZ%、といった具合の複合選抜制である。ご参考にしていただきたい。

【森麻布高校教諭】　同じ高校でも校長とヒラ教員では見方がちがう。たとえば推薦入学制だが、われわれは一種の青田刈りになることを心配する。学園祭、運動会が繰り上っているのも共通一次と無関係ではない。共通一次の終わったあと、学校へ来ない生徒がふえてもいる。二次試験の科目数が旧態依然たる大学と極端に少ない大学があって、大学の独自性とはいわれても納得できない。一次・二次をせめて接続してやってもらえないか。

【橋本日教組高校部副部長】　入試の改善策としてつぎのことを望みたい。①高校教師を参加させるなど組織運営の民主化をはかれ。②代替教科制を認めよ。③足切りをやめよ。足切りの場合はデータを明示せよ。④一次の成績を本人にしらせよ。⑤受験の機会をふやせ。⑥科学的合理的選抜の研究を。

**●パネル「大学側の意見をきく」**

つぎに同じくパネル・ディスカッション「大学側の意見をきく」の発題者による発言を拾う。

【湊東大教授】　二次試験のあり方が問題になるが、結局、各大学でどういう学生をほしいのか、どういう学生なら修学できるかに選抜のねらいはしぼられる。大学とは卒業後に期待される各方面での社会活動のための基礎教育を学生に与えるところであって、それには当然あるレベル以上の知的能力が要求される。落伍者防止の意図もあることをこの際認識しておく必要がありはしないか。

【関口慶大塾監局長】　私立大学の入試担当者のなげきを代弁すると、①こんどの共通一次実施の結果、私立大の受験者予想が従来のようには全く立てえず、受験産業の手をかりても入学者の歩どまりは読めなかった。②私立大専願組は国公立大学のいわば落ちこぼれ組で、進路指導もそのようになされていた。③国公立大学の期日一元化により地元志向がつよめられ、大都市での新設規制と相まって、とくに東京での私立大学のレーゾン・デートルが問われる結果となった。

【浅井早大教授】　私立大も共通一次に参加すべきだとの意見もあるが、現実には不可能だ。現に当大学では延受験者一五万、とうていできる相談ではない。共通一次を入試の一部として適当に利用する大学が出てくるのを止めることもないが、公的に私大の参加をいうなら、構想を新たにしてかからねばなるまい。今年の場合、たしかに受験者は減ったが、これは受験産業のデータによる実質的な予備選抜の結果と見ることもできよう。

**●総括討論の中から**

第二日はまず日経新聞編集委員黒羽亮一氏の講演から始められ、ひきつづき参加者全員による総括討論が行われたあと、送別昼食会をもって交友、交歓の幕を閉じた。以下、全日程を通しての質疑提言の主なものを要約、紹介する。

▽私立大学の共通一次参加について何が障害になっているのか。

＜答＞まず経費の出し入れの点で大いに問題がある――加藤所長。

▽教科目をもっとふやし、受験生にはもっと少ない科目をという選択制をとれないか、あるいは科目をできるだけ減らし、代替科目を認めることができないか。

＜答＞指導要領改訂に伴い、そういう方向にいくかも知れない――風巻校長。

▽志を高めよ、志を自ら決めて受験せよとのご意見があるが、実際は小・中・高ですでに輪切りを受けており、自己評価によりむしろ志を低めねばならないのが現状だ。予備校の話でも国公立の輪切り現象はいっそう深まった。

▽推薦入学の追跡調査をしているが、結果はいい。指定校制を採っており、基準は公表していないが、過去の学生の成績をもとに適宜指定校の選択、入替えをしている――A大学。国公立大学では現在のところ商業、工業などの職業高校に対する配慮がつよいし、この傾向はひろがるだろう――加藤所長。推薦制そのものは結構だが、その数がふえると問題だ。教育上いろいろ障害になる――B高校。

▽わが国の学力は世界でも最高にちかいが、独創性となると問題。共通一次は高校教育の柔軟性をなくし、以前問われた人間能力とか創造性とかいったものを枯渇させはしないか。

▽達成度をはかるというが、標準をどんなところにおいているのか。

＜答＞平均60点を目安においた。それ以上の積み重ねは二次試験にゆずった――加藤所長。

▽自己採点をすすめるより共通一次の成績を公表したほうがよくないか。

＜答＞高校、大学の序列が表に出てしまってまずい。公表するにしても、70点台、75点台、80点台ぐらいのきざみが適当だと思う――加藤所長。

▽共通一次の目的が基礎学力の達成度を見ることなら、時期は三学年のはじめでもいいのではないか。

＜答＞私個人としては10月、11月にできないかと思っているが、ひろく世論に問うてゆきたい――加藤所長。時期を早めることは高校生活を実質的にうばうことだ。英語など積み重ねの要素がつよい学科はおそいほどよい。早めれば早めるほど受験産業におどらされてロクなことはない――C高校。

以上が二日にわたる討論の一部だが、大学・高校の両者から活発な意見の交換がなされ、大学ではとくに私立大学からの参加、質疑が積極的で、共通一次に対する関心の強さを示した。ともあれ熱気あふれる集会であった。

## 懇談会に参加して

◆――早稲田大学教授　浅井邦二

大学教員懇談会にはじめて参加しましたのは、もう六年前になる昭和48年第八回の時で、そのテーマは国立大学の入試の一期・二期制の問題でした。一本化が行われたら私大としてどのような影響を受けるかについても論じられましたが、一般参加者としてフロアから二回の受験のチャンスが一回になってしまうことの欠点は、その一回の入試がどのくらい信頼性のある良いものになるかによるのではないか、第二志望を生かす余地はないだろうか、など発言したことを記憶しております。今回の教員懇談会が企画されるに当り、私大側からの発題者となるようにとお電話いただき、お引受けしてしまいましたが、当日、参加者名簿を拝見すると国公立の先生より私立大学の先生の方の数が多く、また予定されていた上智大学の先生が欠席で、いささか責任が重く、夕食後にはだんだん気が重くなっていったというのが偽らない気持でした。ただ私の発言の直前に慶応義塾大学の関口氏が元気のよい発言をされたのに助けていただいた感じで、それに勢いづいてどうやら発題者としての責任を果たすことができたのではないかと思っております。私としては今回の参加の意義は、むしろ荷が軽くなったその後にあったようで、交友館での懇談会では初めての先生方とお話することもできましたし、おまけに室にもどってからも東大の湊、慶応の関口の両氏とさらに語り合うなど、戸外のうっとうしい天候にもかかわらず、楽しい一晩を過ごすことができました。大学教員懇談会の名称の示すように、この会は懇談に意義があると思います。したがって今後の計画にも懇談（討論を含め）の時間をなるべくゆとりをもって取って頂くようお願いします。

発言の中で、世話人の一人、ICUの原氏が触れられました適性の問題は十分論じられねばならないものとして印象に残りました。

◆――麻布高校教諭　森　昭彦

このたびの懇談会には、高校側発題者として参加する機会を得た。私どもは東京私学教育研究所から委嘱されている「大学入学者選抜に関する研究調査委員会」のメンバーとして参加したので、委員会としての見解は、同委員長の村上光雄先生（日大第二高）に述べていただいた。したがって、ここでは私のきわめて個人的な実感を述べるにとどめたい。

何よりも嬉しかったこと、それは大学の先生方が、専攻分野の壁を越えて大勢参加されて熱心に討議されたことであった。私どもは大学の先生方は――特に一般教育担当でない先生方は――大学入試などには何程の関心も持たれず、学問の名のもとに大学の教育的機能をはなはだ軽視される傾向をお持ちであると思っていた。その傾向は依然として変らないだろうけれども、大学教員が好むと好まざるとにかかわらず、入試制度に関心を示さざるを得なくなったことは、共通一次試験を頂点とするこのたびの入試改革の思わぬメリットであったような気がする。この懇談会に参加された方々は、それぞれ実務の担当者であり、本音の発言が多くみられたのも興味深かった。私は日本教育学会の「大学入試制度検討委員会」で熱心に論議されている、やや理念に傾きがちではあるが青年の進路決定に関わるものとしての大学入試制度の論議と、このセミナー・ハウスでの論議との実りある噛み合いを期待している。

依然として失望を禁じ得なかったこと、それは、大学の先生方がやはり選抜する側の論理しか持たれず、高校以下の学校教育に対する視点を全くといってよいほど持たれていないことであった。入学者選抜の方法、それが教育そのものであるという意識をはたして何人の先生がお持ちであるか、私は強い疑問を持たざるを得なかった。共通一次の出題が高校一年程度の基礎学力を問うものであれば、その段階で受験させればよいというような意見は、それがその段階での資格試験であればともかく、入学試験のステップとして不適当なものであることは論をまたないであろう。大学の先生方は、大学院進学者の決定や就職試験の時期を大学卒業の一年以上も前にすることをお望みになりますか。

推薦入学制度についてひと言。推薦入学には大学にとっていくつかのメリットがあると思われるが、そのために高校教育を妙に固苦しいものにしていただきたくないこと、推薦と名づける以上、高校の推薦を信頼して面接、作文程度はよいとして、学力試験に類することをして一種の青田刈りではないかとの批判を受けるようなことのないようにしていただきたい。

終りにひと言。調査書はあくまでも高校での記録。もし必要なら入学後提出を求める方が役に立つ。要は、大学の先生方が入学者選抜に省エネルギー的視点を持たれないことが肝要と思われます。

◆――東京工業大学教授　藤井光昭

第一回共通第一次学力試験が実施されて、そのあと本学の第二次学力試験があり、合格者が決まった時点あたりから、「共通一次とは……」といった事が経験に基づいて種々議論されはじめている。今回、教務部長の代理で参加してほしいとの依頼を受けたとき、ずいぶんタイムリーな企画だと思った。私達がいろいろいだいている疑問点や問題点について種々ディスカッションが行われるだろうと思って会場に着いた。

会が始まっておどろいたことは、共通第一次を経験した国立大学の教官が少ないことであった。たまたま皆さん御都合が悪かったのだろうが、ちょっと残念だった。しかし私立大の先生方の共通第一次に対する要望や私立大入試への影響などいろいろうかがえて参考になった。

ある程度予想していたとはいえ、高校の先生方から共通第一次の試験期日の設定の仕方が生徒の高校での生活に大きな影響を及ぼすというお話をくり返しうかがった。共通第一次学力試験は一応到達度をテストするものであるといわれてはいるものの、これを早くすると学園祭や運動会など高校での行事に大きな影響があるため、なるべく2月にしてほしいというお話は一応うなずけるが、よく考えるとどうもよくわからない。高校での学習や生活は本来このようにあるべきだということより先に、入学試験対策のためによりよい方法を考えてやらなければならないのが今日の高校の現状だとすれば、何とももの悲しく、やり切れない気持である。私達の考えることは机上の話であり、現場の先生方は理想と現実のギャップに苦しみ、種々の御苦労を重ねておられることと思う。その意味で種々の現場の先生方のナマの声をうかがいたかった。

なにしろ大きなテーマのためどのセッションも時間不足の感じだった。このようなテーマは何回も議論をつみ重ねて深めていくのがよいであろう。その意味で定期的にこのような懇談会を催して下さることを希望する。また入学試験は各大学の秘密を含んでいるが、できる限り多くの大学が共同して研究をすすめる体制ができればよいと思う。今回、入試センターの加藤所長が二日間とも出席して下さったのは大変よかったと思う。

大学教員懇談会に世話人として一泊された東京大学教授寺山宏氏が、体験的感想を作詩され、帰途飯田館長に贈られた。ここに披露して豊かな秋の風情を推量しながら、熱気あふれる懇談会の情景を想像願いたい。

秋雨蕭々黄樹下
繞舎萩叢散紅花
談論無尽分愁友
窓下蟋蟀刻長夜

（昭和54年9月30日　寺山宏）

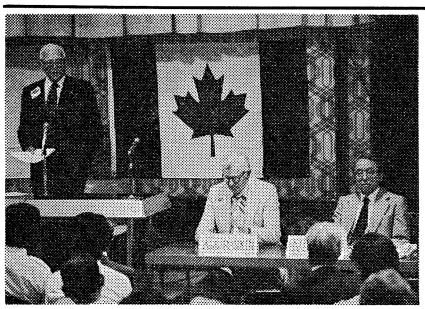
特集

# 8・9月の国際集会から

当ハウス開館以来一四年間に、実にさまざまな国際集会がこの丘で開催されてきているが、その数は近年確実に増えており、ことに昨年夏、国際セミナー館が建設されてからは、規模の大きい本格的国際学会等の利用も多くなっている。このことは、大学間の壁をこえた教育活動の広場であると同時に、国家間の壁をこえた交流の一拠点として応分の役割を果たしたいと願い、これらの集会の開催にあたっても可能な限りの協力を惜しまぬ当ハウスにとって、まことに喜ばしいことである。

相手の物の考え方や見方を直接に〝肌で感じとる〟ためには、共同の生活体験を通じて人間的交わりを深めることが不可欠の条件とされる。静かな自然の中の当ハウスの生活は、まずそれにふさわしい場を提供してくれる、とよくいわれる。また、諸外国からの人々とゼミ合宿等で滞在中の各大学の教授や学生とが極めて自然な形で接触できることも、当ハウスならではのユニークな一面であろう。

本号では、この夏の国際集会の中から、特に8・9両月に開催された第31回日米学生会議、第26回国際学生会議、日加修好五十周年を記念して開かれた日加学術会議、ウィラメット大学日本研究グループの長期滞在、第12回アジア地域出版技術研修コースなどを、参加者の報告や感想をおりまぜながら紹介することとしたい。



壇上のキーンリーサイド初代代理公使と
ランキン駐日カナダ大使，牛場信彦氏

## ❶日加修好五十周年記念「日加学術会議」の開催

――8月31日～9月2日――

日本とカナダが一九二九年（昭和4年）公使を交換し、正式に国交を樹立して五〇年、この日加外交関係の歴史に一紀元を画する年を記念して開催された「日加会議」の会場に当ハウスが選ばれたことは、喜ばしいことである。当ハウスの施設が拡充整備され、このような規模の国際会議を迎え入れることも可能になったことを示すことになるが、それよりも何よりも開館以来一四年の経過の中で築かれた人と人とのつながりや信頼関係が、このようなイベントの招致を可能にするものであろう。日本カナダ学会の会長でこの度の会議の議長の重責を果たされた馬場伸也津田塾大教授は、千人会員として、またゼミの利用者として当ハウスとの関係も深く、今回の会場決定については同教授の配慮に負うところが大きい。

「日加学生交換および会議」を独自に計画し、この度は日本カナダ学会と提携して、「日加会議」に日加学生の交流を組み入れることに成功したアイセック・ジャパン（国際経済商学学生協会）も、毎年当ハウスを利用してきた友好団体の一つである。同会議のあと「参加者全員がすばらしい環境のもとに集い、討論することによって、日加関係の新しいページを開くことができた、といえるのではないでしょうか」と喜びを語った代表の小田徹君からも、その後次の報告が寄せられた。馬場教授の巻頭文とあわせてお読みいただきたい。

なお、「日加会議」はいくつかの点で当ハウス開館以来最大の国際集会となった。昨年秋に行われた国際体育スポーツ史セミナーも〝全館貸切り〟による大型国際学会であったが、この度のように宿舎の収容定員を超える二八〇名の宿泊を一つの集会が記録したのは、初めてのことである。また、初日講堂で行われた開会式には来賓や講演者を含め三六〇名に及ぶ人々が参集し、同日夜の祝賀夕食パーティも本館食堂が収容し得る限りの人びとを集めて行われた。ともに記録的なことであった。それだけに、竹中豊（文化学院）、大熊忠之（日本国際問題研究所）、大原祐子（東京大学）の各氏ほか会議運営の衝に当たられた委員の方々のご苦労は大へんなものであったが、馬場教授を中心とする同学会関係者のチームワークと献身的な働きは、ただ見事というほかなかった。この度の会議の成功が同学会の一層の発展につながり、また日本とカナダの真の相互理解への新たな出発点となることを、この三日間の参会者とともに期待して止まない。

☆　☆　☆

◆私達アイセック・ジャパンは、日加修好五十周年を記念して、「日加関係の新たな展開を模索して」というテーマのもとに、「日加学生交換及び会議」を企画致しました。

この企画の目的は、一つは両主要貿易国間の情報の流れを拡大し、一九八〇年代のあるべき両国関係を模索するものであり、いま一つは日本・カナダ両国においてビジネス・文化面での経験を参加学生に対し提供し、経済制度・経営慣習に対する理解を深めるというものでありました。この目的を達成すべく、六週間の企業研修をはさんで、関西と東京の両地区で学生会議を行いました。

三〇名のカナダ人学生は7月になって次々に来日し、関西コンファランスに参加した後、各地区において企業研修生として、日本企業の経営形態と国際的役割また実務的な諸問題について学びました。かれらはそのあと東京に集まり、8月31日から9月2日まで東京コンファランスに参加し、私達アイセックは日本カナダ学会とジョイントして「日加会議」を開催することに致しました。

8月31日のオープニング・セッションと基調講演には、駐日カナダ大使のB・I・ランキン氏や前対外経済問題担当大臣の牛場信彦氏などにご出席いただけました。翌9月1日にはパネル・ディスカッション、さらには学生だけによるグループ・ディスカッションを行いました。そこでは、東京地区の七つの大学委員会の設定したテーマのもとで、カナダ人学生と日本人学生が納得のいくまで討論を行い、2日のグループ・ディスカッション報告会の場において報告され、再度参加者全員で個々のテーマについて検討を加えました。カナダ人学生にはあらかじめテーマを選択してもらい、各大学委員会のプレゼンテーションが手渡されていましたので、このグループ・ディスカッションは実り多いものになったと思います。特にエネルギー問題については白熱した討論が行われました。

一九八〇年代は、現在よりさらに多くの経済的コンフリクトが生じるであろうといわれています。そのような情勢下においては、国際的な相互理解が重要となることはいうまでもないことでありましょう。私達アイセック・ジャパンが、アイセック・カナダと協力して企画した今回の会議が国際的な相互理解の促進に寄与できたものと確信し、私達は今後とも真の国際交流を目指して活動を続けてゆきたいと存じます。（小田徹―国際経済商学学生協会「日加学生交換及び会議」委員長―一橋大学4年）

## ❷第31回日米学生会議　7月29日～8月5日
## 第26回国際学生会議　8月2日～7日

――画期的合同シンポジウムを試みる――

8月の第一週は学生による二つの国際会議で始まり、内外の若者で溢れた。すでに7月29日から滞在中の第31回日米学生会議（JASC）の八七名に加え、8月2日夜には日本国際学生協会（ISAJ）の主催する第26回国際学生会議に参加するアジア諸国からの三七名を含む計一二四名が到着したからである。

日米学生会議は戦前の暗雲漂う一九三四年（昭和9年）に第一回会議が始まって以来、この四五年間に実に三一回もの学生の自主的運営による会議が開かれてきたものであるが、当ハウスが初めて会場となったのは一九六七年である。同会議は日米両国交互に毎年開催されているが、それ以来日本での開催地はいずれも当ハウスとなっている。本年すでに七回目を数える。

今回の会議の特徴は、当面する諸問題を具体的・多角的に把握しようと数多くの分科会が設けられ、討論により一層現実的視野を取り入れるための分科会別の野外研修に従来より多くの時間をさいていたことであろう。両国の学生がいま共通に関心を寄せる問題が何であるかを知るうえに参考になるので、以下分科会の名称と訪問した主な関係団体等（カッコ内）を紹介してみよう――異文化間コミュニケーション（ICU、いのちの電話）、環境（多摩川下水処理場）、企業と社会（キッコーマン、デュポン）、教育（代々木ゼミナール）、国際関係（通産・外務両省、防衛庁、EC代表部）、社会福祉（寝たきり老人訪問看護）、女性と社会（国立婦人教育会館、総理府、婦人団体）、政治参加（日本共産党本部、武蔵野ボランティア・センター）、文化と芸術（鎌倉、国立博物館）、少数派（マイリティー）問題（東京韓国学校、韓国教会）。

国際学生協会も日米学生会議と母体を同じくし、やはり学生が主体となって国際交流を推進する団体である。その活動は、主に日本と他のアジア諸国との交流に向けられている。昭和28年以来毎夏日本でこの会議を開催しているが、当ハウスでは今年で四回目。日本人学生は八七名、海外からの参加者は韓国、香港、フィリピン、マレーシア、インドネシアなど五ヵ国からの三七名。「輝かしき未来をみつめて」を総合テーマに、異文化間コミュニケーション、発展のための教育の役割、南北問題の解決をめざして、人間と科学技術など四つの分科会に分かれて討論を続けた。

この二つの学生の会議が当ハウスに同時に滞在することは初めてのことであるが、これは両グループが事前に協議し、合同シンポジウムや親睦会の開催など、双方にとって文字通り画期的な試みを日程に組み入れることになったためである。日米学生会議の参加者にとっても、これまで日米の視点のみで把えてきた南北問題などを、今回は東南アジアの国々からの学生とも直接に接し、より広い国際的視野に立って話し合い、それによって多様な人々や国家、その各各が持つ文化的背景・価値観の相違や相互理解の困難さとその必要性などを改めて認識する契機となったことは、極めて有意義であったようである。

☆　☆　☆

◆7月29日より約一ヵ月にわたって開催された今年の日米学生会議も8月23日の米国側代表団の帰米をもって成功のうちにその幕を閉じた。

今回の会議は、この激動する国際社会においてますますその重要性が高まった相互理解の重要性を再認識するため「相互理解に向けて」の総合テーマの下に開かれた。日程としては、まず大学セミナー・ハウスにおいて一週間にわたる集中的討論を行った後、広島における平和に関するシンポジウム、倉敷・岡山市視察、最後に関西地区大学セミナー・ハウスにおける総括会議で、一ヵ月間に得た経験や会議の成果をまとめ上げ、報告書を作成する形で行った。

八王子会議は右のように、今回のプログラムの中では、実質的意味において最も重要な部分を占め、自由な意見の交換、また友好を深める上で理想的環境であった。特に今回は、初めての試みとして、アジアと日本の学生の交流を促進している国際学生協会と8月3日合同シンポジウムを聞き、現代社会が直面するさまざまな問題を単に日米の視点のみならず、アジアの目を通して検討できたことは非常に有意義であった。

日米学生会議と大学セミナー・ハウスとのお付合いも今回で七回、一三年目である。米国における会議開催地に匹敵し、東京近郊で会議を開くにあたり、自然環境・施設そしてコストの面からして、ここに勝る施設は他にないと確信する。（佐保田育夫―第31回日米学生会議実行委員―上智大学修士1年）

☆　☆　☆

◆本年8月1日より16日にわたり開催された第26回国際学生会議（ISC）は、過去25回の総決算であるとともに、80年代への飛躍をかけたものであった。総合テーマ「輝かしき未来を見つめて」の下に、韓国、香港、フィリピン、マレーシア、インドネシアの五ヵ国、三三名の外国人代表団を迎え、分科会、第31回日米学生会議との合同シンポジウム、すもう大会、各種パーティ、日本各地への研修旅行などのプログラムを消化した。

特に本年度は、アジア各国の学生団体を統合するアジア学生連合よりオブザーバーとして副代表のマー君を迎え、また、アメリカ人学生を対象とする日米学生会議との合同シンポジウムを開催できたことは画期的なことであった。このシンポジウムにおいて印象的だったのは、東南アジアの学生が国家を背負い、国家を代表しているという感じで現実的な側面から討論に参加していたのに対し、私達〝先進国〟の学生が、あくまで個人的、理想的な意見に執着していたことである。しかし、そのような観点の違いはあっても、率直な意見を交換し、お互いの生の声が聞けたということは非常に有意義であったと確信する。

8月4日より行われた分科会においては、異文化間コミュニケーション、教育、南北問題、人間と科学技術について討論した。議論が白熱し、意見が対立することもしばしばあったが、討論が終われば、セミナー・ハウスの中庭で一緒にバレーボールをしたり、また、ユニットハウスで夜おそくまで昼間の議論の続きをしたりした。私にとってこのISCは三度目であったが、回を重ねるにつれて、国際交流の重要性、国家・民族・宗教を越えることの困難さというものが強く強く感じられてきた。フィリピンの学生は、「会議は終わるが、私達の友情は永遠だ。いつの日かまたあおう。その時にはもっとすばらしい交流ができるだろう」といった。

最後に、私達の不手際により、しばしばご迷惑をおかけしたにもかかわらず、様々な便宜と快適な生活を与えて下さった大学セミナー・ハウスに実行委員会を代表してお礼を申し上げたい。（倉田隆敏―第26回国際学生会議実行委員長―早稲田大学3年）

## ❸国際セミナー館を本拠にしてアジア地域出版技術研修コース

**9月16日～18日**

この研修コースは、財団法人ユネスコ・アジア文化センターが行うもので、本年は第一二回に当たる。その目的は、アジア各国の図書開発事業に貢献すべき民間または政府の出版機関の出版専門家の養成である。一九六六年5月、東京で開催された「アジア地域出版専門家会議」に表明されたアジア諸国の要請に応じ、かつユネスコが六七年から発足させた「開発途上国における図書開発計画」の一環として一九六七年に始められたものである。たまたま本年は国際児童年に当たるので、それを記念し今回は、児童書、児童雑誌出版の専門家養成を目的に企画された。

研修期間は9月11日から10月12

日までの三二日間であるが、最初の講義に当たる9月16日から二泊三日、参加者相互の理解と友好をつくるため、国際セミナー館で研修生活をされた。

参加者はアジア地域一八ヵ国のユネスコ国内委員会が推薦する者で、本年は次のとおりである。

アフガニスタン、バングラデシュ、中国、インド、インドネシア、韓国、マレーシア、ネパール、パキスタン、フィリピン、シンガポール、スリランカ、タイの一三ヵ国から一八名。出版社の社長、編集長、児童文学作家、教育省の教育官、大学出版部長などである。

研修内容は講義、討議、実地訓練、見学などを通して、出版の企画、製作、流通、マーケティング、経営、読書習慣の養成、著作、翻訳の多方面にわたっている。

このユネスコ・アジア文化センター主催の研修については、当セミナー・ハウスも協力をおしまず、例年の行事として迎え、年毎に連帯を深めている。ことに昨年6月、国際セミナー館を建てたので、この種の国際集会には、積極的に会場を提供したい。センターの職員も当ハウスの環境になれたので、友好的に、効率的に研修コースが営まれている。本年も、初日、国際セミナー館でのオリエンテーションに引続き、交友館で館長主催の歓迎パーティを開いた。

なお、今回初めてこのコースに参加のため北京から来日した中国の二人の女性が、終始明るく、自然に、当ハウスの共同生活にとけこんでいたのが印象的であった。少年児童出版社「少年百科叢書」第一編集主任・朱洪（ズーホン）、人民文学出版社外国文学編集部児童書編集者・任吉生（レンジーシェン）の両夫人で、後日連名で右記の英語による感想文を寄せてくれたので、原文のまま紹介したい。

**≪アジア地域出版技術研修コース≫**

It is an honour for us as the first two Chinese from Beijing (Peking) to visit the Inter-University Seminar House. The three days' visit has been a very pleasant and memorable experience for us. The beautiful natural surroundings has given us a very deep impression, but what impressed us most is your hospitality and friendliness.

We saw with our own eyes, that the Seminar House is really a remarkable place to do academic research for professors and students to obtain deeper mutual understanding and fellowship through living studying and thinking together.

Today the Inter-University House is in its vigourous youth, we wish it would have a more prosperous future.

Zhu Hong
Ren Ji Sheng

## ❹ウィラメット大学日本研究グループの長期滞在　9月3日～15日

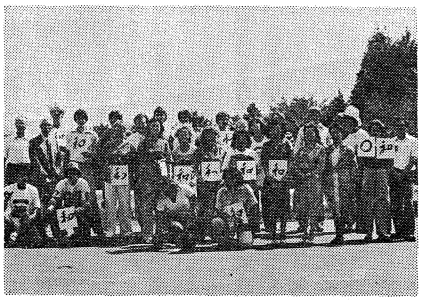
**――外国大学の滞日学習への協力**

日加会議が終った翌日の9月3日、見るからに元気に溢れた米国の男女学生の一群が成田から到着、以後二週間当ハウスの共同生活の仲間入りをした。この丘を闊歩する彼らがかもし出すさわやかな活気は、食堂の中でも、夜の交友館でも、少しも違和感を感じさせない。米国オレゴン州セーレムにあるウィラメット大学からやってきた日本研究グループである。

ウィラメット大学は国際商科大学の姉妹校であり、同研究グループは両校の交流計画の一環として隔年ごとに来日するもので、約四ヵ月にわたる日本滞在の最初の部分を当ハウスでの日本語集中研修とオリエンテーションにあてている。当ハウスの利用は50年、52年についで三度目である。今回は学生二五名（うち女子一〇名）に引率のポール・デゥエル教授夫妻（と中学生のご子息ケビン君）の計二八名、これに日本語教師二名が加わるから、同グループは、その大きさといい、その利用の目的といい、国際セミナー館（三〇人収容の宿泊研修棟）にお誂え向きである。

毎日午前中いっぱいと午後の三時までは二つのグループに分かれて日本語の会話の猛練習。そして夕食後の一時間半を日本の人と生活に関する講義と討論にあてていた。9日の日曜日には、早朝より富士登山に出かけた。この集中的スケジュールにひるまず挑戦する米国の若者たちに、少しでもくつろいでもらおうと、当ハウスは11日午後、構内の民家・遠来荘でのお茶会に全員を招待した。この機会は、近隣に在住の矢内喜久子相模女子大講師と二人のお弟子さん、当ハウス職員の協力で設けられたもので、茶道の歴史が短く紹介され、お茶の実演があった後、全員が交互に抹茶を立て合ったりしたが、みな真剣なまなこでこれに取組みながらも、終始なごやかな空気に満ちた楽しいひとときであった。また最終日には、書をよくする北澤高純事業部職員がお茶の心「和」を書いた色紙を、当ハウス滞在の記念として、一人ひとりに贈って喜ばれた。

同グループはここを立ってから12月中旬まで、日本の家庭に分宿し、国際商科大学の授業に加わりながら、さまざまな体験と研究を続けているが、来日直後の当ハウスでの二週間は、右に掲げた印象記にも伺われるようにその後の滞日のよき導入部となったようである。特に、当ハウスを利用する日本人学生と自然な形で接触ができたここでの生活は、他では得られない貴重な体験となったようである。



ウィラメット大学の学生に「和」の色紙を贈る

**≪ウィラメット大学日本研究グループ≫**

IUSH is a great place to stay if you are one who is into intensive study. I really enjoyed my stay here. This is an excellent place to be introduced to a new country.

I hope that IUSH will continue the international program. It was a great benefit to me and I'm sure it will be the same kind of benefit to other foreign students.

☆

IUSH offers diversity with unity. The motto, "Plain Living and High Thinking" describes well the experience here. The harmony of nature, the intellectual challenge, and the variety of colorful, delicious, nourishing menus have fed body, mind and soul.

☆

IUSH is in a very beautiful setting. I think that this is a great place for learning. It is also a great place to meet many nice people. The staff was very helpful and patient with us. I will always have good memories of this place. The tea ceremony was a very elegant and beautiful thing to see. I feel that by studying, interacting with the people and through many experiences here I have improved my Japanese.

## ◉事業部だより

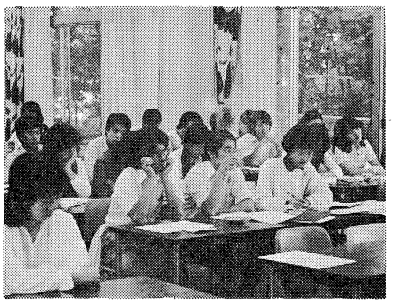
例年のように、8月は夏休みを利用した学生の国際会議や語学集中研修など、比較的長期滞在の大きなグループが相次いだ（ゼミ回数九二、宿泊延人数六、一六六人）。これと対象的に9月は夏休みの最後あるいは終了直後を合宿にあてる各大学のゼミ利用が多くなり、ここ数年の統計が示すとおり、今年もゼミ回数、利用率とも高い数字を記録した（ゼミ回数一三〇、宿泊延人数五、六二五人）。

本号では、この両月中の利用の中から特に二つのグループの合宿を紹介することにする。

その一つは、立教大学文学部の「集中合同講義」で、当ハウスでの開催は昭和48年以来連続の七回目。今年も夏休み終了直前の9月中旬に四泊五日で行われ、教師六名と学生五二名、計五八名が参加している。この企画の特色の一つは、文学部が中心となりながらも、他学部・学科にも開かれていることで、今回は他学部の学生だけでなく、教師の一人は法学部からも参加している。毎回、個別学科の専門をこえた綜合的視野からテーマが選ばれているが、今回は「私のなかの日本――アイデンティティを求めて」。これをめぐって講演、パネル・ディスカッション、小グループに分かれての講読と討論、総合シンポジウムなど、文字通り集中的スケジュールが組まれていた。共同セミナーや国際学生セミナーを指導されるなど当ハウスともご縁の深い前田愛、塚田理、戴国煇の諸先生も、それぞれの個人体験に即した熱のこもった講演をされた。何よりも教師と学生の一体感を強く感じさせる集会であったが、参加学生からも、この合宿の中で持つことのできた教師との人格的接触、さらに学部・学科をこえた交流を高く評価する声が聞かれた。

二つ目のグループは、東京理科大学の「人間関係ワークショップ」（通称エンカウンター・グループ）で、夏休みの8月下旬、教師二名と学生四〇名（うち女子一七名）計四二名が三泊四日で行った合宿である。この人間関係ゼミは同大学の一般教育ならびに教職課程の一環として設けられたもので、国分康孝教授が情熱を傾けて指導しておられる。エンカウンター・グループの目的は共同の生活体験の中で自他の気付かなかった「自分自身を発見する」ことにあるようで、その格好の場を当ハウスが提供するといわれる。9月下

（次頁三段目へ続く）



立教大学の集中合同講義（大学院セミナー館）

### ◈自由な空間〈その1〉
### セミナー・ハウスでの集中講義

立教大学教授　前田　愛

立教大学の文学部では、カリキュラムの目玉のひとつに、集中合同講義という科目がある。これは六九年の大学紛争への反省から発案された科目で、専門の学科をこえた綜合的視野のもとに、あたらしい人間学を再建して行こうという試みであった。第一回は七三年9月、テーマは「近代自我の問題」である。池袋のキャンパスで数回のオリエンテーションを積みかさねた上で、夏休みのおわりに、大学セミナー・ハウスの合宿で総仕上げをするという方式は、第一回から変っていない。

第二回以降のテーマは、「天皇制とキリスト教」「近代日本と西欧」「言語・人間・社会」「歴史における人間」「戦後民主主義の諸問題」などで、本年度は「私のなかの日本――アイデンティティを求めて」というテーマがえらばれた。特別講師としてお願いした安宇植氏の講演は、日本の社会のなかで疎外されている在日朝鮮民族の立場を氏の体験にたくして語られたもので、学生たちに深い感銘を与えた。

四泊五日の期間に、講演、テキストの講読、パネル・ディスカッションなどがぎっしりつまっているスケジュールは、学生たちにとってもかなりきついらしい。討論が白熱してくると、予定の時間を大幅に超過して、深夜まで引きつがれることもある。何よりも、キャンパスで手渡されるきれいに包装された学問の体系とは異質な、熱っぽい知の運動が学生たちにとってはかけがえのない刺戟になっているようだ。教室での授業は、一種の密室であって、教員同志はなかなかお互いのものの考え方や学問の内容を知ることが難しいのが現状だが、教員相互の理解が格段に深められることも、この集中講義の効用としてあげていいかもしれない。

私は都合六回、この試みに参加しているが、自然の環境をたくみに取入れたセミナー・ハウス全体のデザインは、ことのほか気に入っている。大学のキャンパスが、病院や監獄に通底する管理空間であるとすれば、このセミナー・ハウスは、もうひとつの開かれた大学を可能にする自由な空間に近いものであることを感じさせられる。こうしたセミナー・ハウスで行われる集中講義の活力を、キャンパスのなかに、どのように環流させて行くか。それが今後にのこされた課題であるようにおもわれるのである。

### ◈自由な空間〈その2〉
### 人間関係ワークショップを指導して

東京理科大学教授　国分康孝

名札を紐で首からたらして食堂に来る男女大学生の集団。これが同僚菅沼憲治と企画・実施している私どものエンカウンター・グループである。

この大学セミナー・ハウスは私どものプログラム展開に最適である。自由と自治の場がふんだんにあるからである。一斉起床を強いられない、国旗掲揚もない、門限もない。一般社会の価値観から脱脚して、自分のありたいようなあり方を試行錯誤できるからである。夜を徹して語ることもできるし、生まれて始めて異性と山林を散策し青春を味わうこともできる。

自由が放縦に堕さないために私どもは参加者全員に役割を与えている。食券係、食事係、レク係、スナック係、伝令係、清掃係、鍵係、お湯係、ルール係、黒板消し係、進行係などがその例である。役割を演ずることによって、自他の気付かなかった自分を発見することもできるし、参加者のヨコのリレーションも高まる。講師の私どもの心身の疲れもちがう。

大学セミナー・ハウスは貸会場屋になってはならない。私どもは機会あるごとにこのハウスの理念を参加者に伝えるようにしている。恵まれた自然にふれるよう野外セッションも一日一回はもつようにしている。が、これはまだ不充分である。

一度は法政大のグループと交歓会をもった。私どもの学生は大変生き生きとしていた。すごくよかったというのである。当ハウスはひとつのコミュニティであるから他のグループとの交流は意味のあるプログラムだと思われる。

## ●館長日記から

増田四郎先生古希記念論集「ヨーロッパ経済・社会・文化」をいただいた。論文執筆者の中には知人も多いので、わからないながらも拾い読みをした。先生は一橋大学長の終り頃に当法人の理事長をされ、建設の募金に奔走して下さった。還暦をこの丘で祝った先生が古希を迎えられた。この人が来ると温い風が多摩の丘の樹々の間を吹き抜けるから妙である。◆ルソー全集第一巻「告白」の大著を訳者小林善彦東大教授からいただいた。たまたま「ルソーと共に現代を問う」セミナーの開催時にご持参下さったのも二重のよろこびであった。中公新書「パリ日本館だより」を書いて、小林教授はフランス人とつきあう法を公開された。その人が現代に役立つ古典として「告白」を訳著されたことを心からよろこびたい。◆昨今、指導教授を伴わない学生だけの自主ゼミが多い。よい傾向である。彼等の勉強振りに心ひかれ、交友館のコーヒーアワーに招くことがある。専修大学の萩原ゼミ、中央大学の丸尾ゼミ、都立大学の清水ゼミなどから、笑談ながら館長は永遠の青年だとほめられた。◆順天堂大学病院業務改善セミナーは今年で一四回目。この研修会は毎年秋に行われるが、際立って熱心である。有山理事長、懸田学長も指導に当られ、学内調和の頂点に立っている。小林裕一事務部長はこの病院の隅の首石らしい。◆石坂泰三記念講演をされたヒース元英国首相の歓迎会があった。彼は貧しい漁村の家庭に生まれた。幼年時代に教会で音楽を学び、やがて指揮者となった。奨学金を得てオックスフォード大学に入学。ヨットの選手となり、いまも会長である。絵も描くという。こうして心身健康な政治家が誕生するのである。彼は私に人づくりの秘法を教えてくれた。◆私は謝礼二万円をある学会から、原稿料九千円をある雑誌社からいただいた。私はこの金を徹底的に自分のために使うことにした。ある秋の日に、新宿に出た。ルノアール展を観た。しゃぶしゃぶの昼食をとった。洋書のバーゲンをのぞいた。上野に足を延ばし、独立美術展で小島善太郎の絵を見た。雑踏するアメヤ横丁で支那服とハネジューメロンをねぎった。秋日、浩然の気を養うことができた。◆10月20日の夜慶応大学新聞研究所の学生一三人から約三時間のインタビューをうけた。新聞学の練習台に立たされたわけである。指導者は毎日新聞記者今田好彦講師である。後日、予期していなかった私の人物評がとどいた。若者の眼が遠慮会釈なく私という人間を観察した月旦である。他人に公開する勇気はないが、私を知る上で得難い資料である。◆10月末で千人会担当の北沢高純君が定年退職をした。彼は書道家である。千人会の誕生カードは彼の筆になるものであった。遠来荘に茶道教室を開くほどの趣味人でもある。◆日豪セミナーのクラーク教授が二人のこどもをつれて来られた。甘柿をたおって贈呈した。手をふって別れた。題すれば晩秋の丘の友情となる。

旬に行われた都立大心理学科のカウンセリング・ワークショップなど、近年ますます類似グループによる利用が増えてきているのも、この理由によるものであろう。

**●キャンパス点描**

8月1日＝日米学生会議の参加者八七名（うち米国人学生四二名）を交友館での〝冷いジュース〟に招待し、歓迎の意を表した。

8月18日＝夕食時に在泊の八グループ二四三名が交歓。各グループの紹介では、会員校加入後最初の利用となった千葉大医用電子工学会を特に歓迎。英語教育協議会（ELEC）セミナー参加者全員の英語による輪唱のあと、東京ヴォランティア・コヴィアの美しい聖歌の合唱三曲が披露された。

9月13日＝学習院大部課長研修会（二五名）が全員ユニット・ハウスに二泊三日し、交友館も利用して学生と共通の合宿体験をされた。

9月15日＝週末の交友館で法大・石谷ゼミ（二〇名）と専修大・国井ゼミ（一五名）が交歓。特に前者は第二部の勤労学生で、教師や学友（まして他大学の学生）との交流の機会は得難いので、その喜びもひとしおの模様であった。

9月21日＝夕食時の食堂で一二グループ一六四名が交流。各グループ代表のユーモアをまじえた〝一分間ゼミ紹介〟で相互に親密感を深めた。学習院大パブリック・スピーキング研究会有志による英語の暗唱、津田塾大・江口朴郎教授のスピーチなど。

**●原爆許すまじの早期集会**

**8月6日8時15分を記念する**

広島原爆記念日も今年は三四周年を迎えた。当ハウスでもこの日を記念して、毎年、教師館屋上に利用者有志が集まり、早朝の静かな空気の中で、真理の鐘を合図に一分間の黙禱を捧げることになっている。今年も「文学教育研究者集団」がこの時期に開かれ、約八五名の教師達が5日から8日まで在泊され、積極的に参加された。その中に広島の小学校教師が五名参加されていたので、点鐘の役をしてもらった。飯田館長が短い感話をされた。平和を愛すること以上に現在最も大切なことは平和をつくるために広い視野で、世界の流れを調整する知的・道徳的行動をとることであろう。9時から講堂に集っていた文学教育研究者集団の先生方が講義を前に〝原爆許すまじ〟を合唱しているのも、原爆記念日らしい光景であった。

黙禱館屋上で1分間

**●利用状況**

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用

**■8月**

慶応義塾大学教授　＊＊　加藤　寛
武蔵工業大学教授　　益子　正巳
8月＝六、一六六人
9月＝五、六二五人

慶応義塾大学講師　中込　昌孝
中央大学教授　小林　丈児
東洋大学現代文学研究会
東京大学岡崎勉強会
横浜国立大名誉教授　沼田　滋夫
慶応義塾大学助教授　鷲見　洋一
青山学院大学助教授　笹森　健
立教大学体育会自動車部
東京大学助教授　虫明　功臣
東京大学教授　和田　英一
早稲田大学教授　宮寺　功
東海大学講師　安倍　道子
東京理科大学教授　大澤綱一郎
東京大学助教授　岡村　甫
東京理科大学教授　伊丹　邦夫
法政大学講師　江口　朴郎
中央大学助教授　一井　昭
千葉大学医用電子工学研究会
成蹊大学助教授　植村　栄治
立教大学教授　三戸　公
中央大学教授　丸尾　直美
東京薬科大学教授　川瀬　清
東京大学助教授　村上陽一郎
東京大学サルトル読書会
一橋大学法学研究会
東京学芸大学古代文学研究会
東京理科大学教授　国分　康孝
国際基督教大学教授　井上　和子
国際基督教大学助手　大西　直樹
国際基督教大学教授　都留　春夫
成城大学教授　山田　俊雄
青山学院大学助教授　寺東　寛治
一橋大学教授　佐藤　毅
東京学芸大学教授　永野　賢
東京都立大学助教授　桐谷　維
東京都立大学助教授　山崎　淳
東京大学助教授　長尾　龍一
学習院大学教授　小泉　一郎
学習院大学教授　児玉　久雄
東京大学哲学研究会
鶴川女子短期大学演劇部
東電学園大学部

明星大学スクーリング
市川きもの学院
都立立川短大助教授　斎藤　浩子
日米学生会議
日本国際学生協会
語学教育振興会
日本基督教団国立教会聖歌隊
バロック音楽アカデミー
文学教育研究者集団
エンゼル保育園
東京都高等学校英語研究会
千葉市幼稚園協会
ゆりが丘聖書研究会
東京スクール・オブ・ビジネス
東京ヴォランティアコワイア
英語教育協議会
多摩地区看護教育研究会
子どもとつくる生活文化研究会
カトリック御受難修道会
日本電気＊＊
石油資源開発社員研究会
小西六写真工業＊＊
大同信用金庫
富士電機製造
税務実務研究会
大沢ビジネスサービス
日本運搬車輛機器協会
東洋ガラス
ソフトウェアマネジメント
伊勢丹労働組合

## ▼第107回大学共同セミナー

**主題**　仏教と人生――仏教における真・善・美の探求――

**期日**　昭和55年1月11～13日

〈全体講義〉
人間の主体性と有限性
法政大学教授　山崎正一氏

〈セクション演習〉
A人生における聖なるもの（峰島旭雄氏）／B無明と原罪―比較宗教学的考察（吉田宏晢氏）／C仏教にみる美意識（島田外志夫氏）／D仏教の真理観（横山紘一氏）

＜申込締切日＞12月20日
＜参加経費＞七、八〇〇円

◇

＜公開プログラム＞
ゲスト対談「私と仏教（仮題）」
山内恭彦・西谷啓治両博士
＜司会＞筑波大教授　三枝充悳氏

**期日**　昭和55年1月12日(土)午後

## 予　告

日本化薬
日産自動車
【個人利用】
赤塚第三中学校教諭　南出　新治
日本標準＊　山崎　昌甫
専修大学学生　大羽　一成
横浜平沼高校教諭　和田　良子
法政大学教授　西川大二郎
上智大学助手　間島　理
産業能率大学助教授　山田　善靖
一橋大学助手　栗原　尚子

**■9月**

中央大学助教授　木島　淑孝
日本大学中国語研究会
武蔵大学助教授　兵頭　高夫
津田塾大学ＥＳＳ＊
武蔵大学教授　私市　保彦
慶応義塾大学英語会
法政大学教授　豊田　武
法政大学学友会技術連盟
東京工業大学教授　永井陽之助
東京都立大学講師　山川　仁
東京大学教授　木村尚三郎
駒沢大学教授　鈴木　幸毅
法政大学助教授　公文　溥
一橋大学教授　好美　清光
早稲田大学教授　大春慎之助
東京大学教授　坂本　義和
日本大学助教授　川端　逸典
横浜国立大学歴史学教室
成蹊大学教授＊　宇野　重昭
早稲田大学教授　畑　穣
日本大学助教授　野口　建彦
東京大学教授　秋山　虔
早稲田大学教授　西宮　輝明
学習院大学部課長研修会
学習院大学教授　門脇　卓爾
早稲田大学教授　吉阪　隆正
法政大学教授　兼子　春三
一橋大学助教授　村井　敏邦
東京大学教授　相良　亨
東京大学教授＊　小林　直樹
東洋大学教授　松岡　八郎
専修大学教授　国井　成一
法政大学教授　石谷　行
早稲田大学講師　奥平　康弘
東洋大学図書館学専攻生の会
明治大学教授　原　正彦
津田塾大学教授　上田　明子
東京経済大学助教授　佐藤　博
東京経済大学教授　竹前　栄治
神奈川大学教授　小山吉之助
東京農業大学栄養化学研究室
慶応義塾大学教授　十時　厳周
法政大学教授　秋田　成就
共立女子大学日本民話研究会
慶応義塾大学教授　中村　勝己
東京経済大学講師　西川　義朗
早稲田大学講師　深沢　実
青山学院大学教授　深沢　毅
立教大学教授　木下　三宅　義夫
上智大学教授　尾崎　鑒治
立教大学文学部集中合同講義
横浜国立大学教育学教室
明治学院大学助教授　松島　浄
早稲田大学講師　北野　弘久
津田塾大学教授　江口　朴郎
青山学院大学教授　新間　進一
津田塾大学講師　星野　昭吉
明治学院大学教授　増田　茂樹
武蔵大学助教授　一楽　信雄
学習院大学教授　荒井　良雄
青山学院大学教授　菊地　元一
立教大学教授　茂木　虎雄
慶応義塾大学教授　檜谷　昭彦
津田塾大学教授　中里　明彦
東京工業大学教授　黒沢　一清
明治大学助教授　油井大三郎
成城大学助教授　鈴木日出男
東京理科大学英語研究部
武蔵大学講師　犬塚　孝明
早稲田大学教授　川原　栄峰
明治学院大学教授　小野　哲郎
法政大学教授　倉持　俊一
東京都立大学助教授　倉沢　進
上智大学教授　蠟山　道雄
相模女子大学講師　矢内喜久子
東京都立大学助手　田村　俊和
東京女子大学教授　遠藤　真二
日本女子大学教授　小川　信子
神奈川大学教授　鈴木　芳徳
東海大学教授　藤家禮之助
東京大学教授　小林　善彦
東京都立大学教授　東　洋一
上智大学教授　鶴見　和子
東京都立大学カウンセリング・ワークショップ
立教大学教授　武沢　信一
上智大学教授　平井　久
上智大学カウンセリング研究会
埼玉大学助教授　町田彰一郎
横浜市立大学助教授　戸田　洋樹
淑徳大学講師　米川　茂信
山梨英和短期大学英文学科
都立商科短期大教授　石井　良明
横浜市立大学教授　越智　昇
ウィラメット大日本研究グループ
立正大学教授　中村　禎里
千葉工業大学土木工学科
東京芸術大学教授　小泉　文夫
第16回大学教員懇談会
日加学術会議
東京世田谷ＹＭＣＡ
高橋聖書研究会
崇教真光修養会
第12回アジア地域出版技術研修コース（ユネスコ・アジア文化センター）
日本基督教会東京中会日曜学校委員会
自由が丘教会
原田鶏卵
セキド電機
レヴセン
小西六写真工業＊
東芝電子事業部＊
酒類食品流通研究所
ソフトウェアマネジメント
戸塚法律事務所
日野協力会
京王プラザホテル
【個人利用】
早稲田大学学生　後藤　春彦
早稲田大学学生　服部　政史
立教大学職員　黒田　哲朗
東京大学助手　清水　韶光
明治大学助手　中村　幸安
東京ガス不動産　米山　哲夫
高丘工業　水谷　喬次
日本女子体育大助教授　河田　喬夫

## ●編集後記

本号では、夏に行われた国際的集会を取り上げた。その中でも、日加学術会議は最大の行事であったと思われるので、馬場伸也先生を煩わし、巻頭を飾ることができた。国際セミナー館・交友館が建った昨年を契機として、当ハウスの施設がこうした国際会議にも対応できるまでに成長したことを、この『特集』から読み取っていただきたい。（能）